寺本知の世界

パネル展

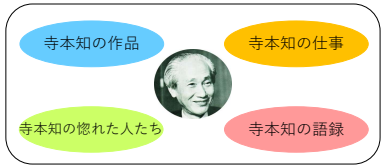
寺本知の世界

～文化・文学～

寺本知さんといえば、部落問題をはじめとする人権問題に取り組んだ人、喫茶店の経営者、市議会議員といった顔が浮かびますが、それだけではありません。人間の解放を求め、文化・藝術をこよなく愛するとともに、自ら詩や小説を書く創作者でもありました。同人誌「豊中文学」や「部落解放文学賞」「識字運動」などに、その足跡を見ることができます。

パネル展「寺本知の世界～文化・文学～」では、寺本さんのそうした側面について知っていただくことを目的に、詩や小説、書などの展示をはじめ、文化・文学活動に関わる仕事、交流のあった人々などについて紹介しています。

「寺本知の世界」の一端を体感し、新たな魅力を発見していただければ幸いです。



にんげんはすばらしい

にんげんは
うつくしいことに感動する
その感動は
ときには
美の創造となり
真の造型となり
その存在は
時間をこえて
永遠となる
文化　芸術は
はたらく者が創る
大地から盛り上がる
にんげんは　すばらしい
労働の歓喜
生活の哀歓から
うつくしく
ゆたかな
文化を
創る
文化とは
人間の解放である

たわむれの石でも

「私なにか　悪いことをしましたか！」
と悲痛な叫びをのこして一人の娘は
自らの命を絶った
差別は恐ろしい
凶器をもちいずに
人を殺す

子供が　たわむれに
蛙にむかって
石を投げる
たわむれの石も
蛙に当れば
致命傷

差別の石も　人を殺す

くすぶる
差別が
火を吹けば
戦争となる
差別の思想は　戦争につながる

元来
にんげんは　すばらしいもの
母の泪に光る愛　やさしい胸
平和をいだく
血まみれの手で
つかもうとする
自由と　平等

にんげん
この偉大なもの
憐れんだりして
人間を冒涜してはならぬ

人間は尊い

手

あの日
あなたは二十一歳
はじめて　手を握ってみたら
「痛い！」と
あなたは悲鳴をあげた
おどろいて離したあなたの手は
霜焼けで
赤く腫れあがっていた

結婚して……
翌年
爆弾のとどろく中で
女の子ができた
それから……
男の子ができて
また
男の子ができた
上の娘は
もう十八になった
男の子たちも大きくなった

もう　すぐ
正月がやってくる
今夜も　あなたは
就寝まえに
手のヒビわれに
クリームをすりこむ
カサ　カサ　カサ
静かな
夜だ

（一九六三年師走の夜）

妻を抵当に

師走の街は
賑わっていたが
「魂の種を売る店」と書いた
わが古本屋「文苑室」は
閑古鳥が啼ずいていた
すんまへんでした」
一人の客が入ってきて
とおれをいうとした
棚ざらしになってた
古いドイツ版の
医学書を買ってくれた
年末　金の乏しい時だったので
とても嬉しかった
買ってくれたのは
西宮のお医者さんで
配達してくれとおっしゃる
でも　その医学書は大判で
二十数冊もあるので
翌日
妻にも持ってもらって出かけた
電車を降りて
駅前通りの魚屋さんに
お医者宅までの道のりを訊くと
半里（二キロ）は

軽快にペダルをふんで帰ってきた
妻は　魚屋の店先で　しょんぼり
魚屋だけて待っていた
うおだけて待っていた　おおけに
すんまへんでした」　たすかりました
とおれをいうとした
魚屋の主人さん
ねじり鉢巻をはずしながら
奥から出てきたが　突然
「あッハッハハハ」
と大口あいて笑いだした
「どこの世界に妻を抵当に置いて　自転車を
貸してくれいう人がお嬢ハハハハ
あんたみたいな面白い人は始めてやハハハハ
変わったおいやハハハハ」
と嬉しそうに笑いつづけた
「おおけに助かりました
これ　ほんのお礼のしるしだす」
と私が僅かな金子をさしだすと
「そんなん　いりまへん！いりまへん！」
と大きな掌を　私の眼の前で

霹靂

母の葬儀がすんで三日目
看護していた妹が
何枚かの紙幣を私にさしだして言う
母が死ぬ数日前に――
自分が死んだらこれを兄にわたしてくれと
……その時　母は
「もっと残してやりたかったが　これだけしか
残らんなんだ……」
と淋しいそうにいったと言う

私は
生前中の母に　まとまった金子をあげたこと
はない
母が僅かながら
まとまった金額を手にするのは
亡き父が　永年勤続した役所からくれる遺
族扶助料だけであった
つきだされた紙幣十枚

紙幣は今
霹靂となり
閃光を発して
私を撃つ

哀惜と悔恨
たちまち
私は
泪の
泥海に沈みこむ

守ってくれた
高松君は　過労からカリエスで斃れた
二十七歳の若さで死んだ
先輩同志の石田さんは　店も人手に売りわたし
うす暗い施療病院のベッドで
木乃伊のようによこたわっていた
肝臓癌だった　手をにぎると
「てらもと　おれ　もう　あかんわ…」
とかすれた声が　ようやくききとれた

ただ一人
中央本部で活躍していた
全国書記長の山口さんは
臨月の妻と子供をのこして
行方不明
彼は　三ヶ月すぎて
奥多摩の林の中で
自殺体となって発見された
四十三歳だった

私を見上げると
にっこり笑った　生きている紅い林檎
純粋の幼い生命が笑っていた

そのとき
凍りついていた私のこころに
ポッと　あたたかいものがついた
その灯をだきかかえて
何日ぶりかで
表へ出てみた
木枯らしで裸にされた
柿の木に
二羽の雀が
寒そうに
丸くなって
よりそっていた
空は
深々と
冷たくまで蒼く
太陽に澄みきっていたが
静かに
燃えていた

啓　蟄

太陽も星もない
まわりのどこを探しても
わずかなぬくもりさえもなかった
孤独と絶望の淵であがいていた

敗戦後
自由と平等を指し
炎々と燃え上がった
部落解放の炬火は
吹き荒ぶ
弾圧の嵐の中で
その火は急速におとろえていった
卑劣にも権力は
解放の父　松本治一郎先生までも
不当にも公職追放に処した
同志も離散した
食糧も極度に欠乏していた
今日一日生きのびるのが精一杯だった
大阪の砦を　私と共に
最後まで

ある朝　私は
突然　喀血した　微熱はとれたが
幸いにも討ち
職場へ銭首にされた
むろん一銭もなかった
古本屋をはじめた
でも債鬼がうるさくて
客が買ってくれるまで待てなかった
棚の本は次々と
同業者だけの古書交換市でたたき売った
もうなにもならなかった
おとなしい妻までも
ぐちり　歎く
ああ
まわりはみんな敵！

そんな時
長女は一歳
ガサガサ這ってきて

たっぷりあるという
書籍はどっしりと重く
ふうふう喘いでいた私は
半里ときいて　たまらん…と思った
ふと見ると　そこに
天の助けか
屋号を大きく印した
魚屋さんの自転車が置いてあった
私は　とっさに
「すんまへんが　女房をここへ置いときまっさかいに
自転車貸してくれまへんか！」
と訊いた
すがりつく想いだった
ねじり鉢巻　髯の濃い魚屋の主人さんは
両腕を組みながら　私をぐっと睨みつけると
黙って……うん……と頷いてくれた

団扇のように振った
よくみると　髯面で達磨そっくり
人のよさそうな主人さん
哄笑してる
その白い歯並みをみていると
私は
ぐっと胸が熱くなり
喉もとにつまってしまった
お礼の言葉が
妻と二人　丁寧に頭を下げて魚屋を出た
街には　歳末大売出し……の幟が
バタバタはためいていた

（三十年前の古本屋だった頃の思い出）

おかげで　私は重い書籍を
早々と運ぶことができた
その金三円也　私にとって大金だった
それを懐に
頬を刺す木枯もなんのその
春風みたいだった

寺本知の惚れた人たち
西光万吉

「そうして人の世の冷たさがどんなに冷たいか、
人間をいたわることが何であるかをよく知っている我々は、
心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。」

水平社宣言は言葉が凝縮されていて、これはもう詩ですね。
人間解放を叫んだ詩です。
ポエムですわ。
ああいう素晴らしい文章が出現した原点に、
もう一度もどって出発したいと考えているわけです。

部落解放運動の最高の指導者は、
差別者、悪い奴にたいして徹底して闘うけれども
本心はすごくやさしい人々だったということです。

やさしさが根底にあるから、
真に人間としてやさしいから、闘いぬけるということを
ボクは西光万吉さんという先輩から教わるわけです。

西光万吉さん（1895年～1970年）

「水平社は、かくして生まれた。
人の世に熱あれ、
人間に光あれ。」

寺本知の惚れた人たち
野間宏（作家）

野間さんの寺本さんへの信頼は深く、亡くなる7日前、本人から電話があった。

「の…のま…です。てらもとさん。別に用事はないのですが、なぜか、あなたに電話したくなって、…」

いつもと様子が違う、何か不安なものを感じた、と寺本さん。
三歳年下の野間さんは、寺本さんを兄のように思っていたのかもしれない。

野間さんに向けた詩「生命深々」
その下書きの裏に、こんなメッセージが残されていた。

私は今も
私の心の中には　今も
哀しみの泪が沈んでいて
重くよどみ　私を浮上させない一ので困っている
深夜のTEL
人間にやさしかった

野間さんと寺本さんの間の
強い「兄弟」としてのやさしいつながりが表れている。

野間宏さんの「朝日文学賞」受賞式にて

オホーツクの紅い花

網走駅前の
郷土料理店に入ると
花咲蟹と毛蟹が
紅い　花のように大皿に盛られてきた
この　北の海の花たちには
トゲと強ごわい毛が生えていて
どちらもチクリと指先を刺すが
私は食欲どんらんに
その白い肉をむしり食った
帆立貝の刺身も
コリッと甘い
熊オヤジのように満腹して
表に出ると
向い側の
みやげもの屋のウインドの中で
大きな木彫の熊が
ニヤリと笑う

寺本知の惚れた人たち
佐藤忠良（彫刻家）

松本治一郎像の制作を依頼した
佐藤忠良とも温かな交流のエピソードがある。

三度目のアトリエ訪問の際、
ついつい芸術のことに夢中になるあまり、
寺本さんは肝心の代金のことを忘れてしまった。
勇気をもって東京駅から電話したところ、
佐藤さんから意外な返事が。

「寺本さん。代金はいりません。」

佐藤さんは中国に留学していたころ、松本治一郎氏に会い尊敬していた。
「だから、先生のお人柄はわかっています。お金はいりません。」
そんなあほなことあるかい！？と代金は支払ったとのこと。

「彫刻ひとつにも人間の美しい心の交流がおまっしゃろ。」

佐藤忠良さんのアトリエにて

寺本知の惚れた人たち
坂本　遼（作家・詩人）

詩人・寺本知の誕生を決定付けた人、それが坂本遼。
寺本さんが『豊中文学』に小説の代わりに「やむなく」発表した5篇の詩。
それを大阪朝日新聞の文化欄でほめてくれた。

遠い峠田のてっぺん
あれは　おかんかいな
鳥かいな
（「春」　坂本遼）

坂本さんにとっても、寺本さんにとっても、
母は共通の特別の存在であったのかもしれない。

温かく、やさしい人間の心は、どこで養えるかといえば、
やはりそれは、
人間－多くは母の愛情（やさしさ）－と自然である。

「たんぽぽ忌」の様子

坂本さんの生家周辺のれんげ畑で

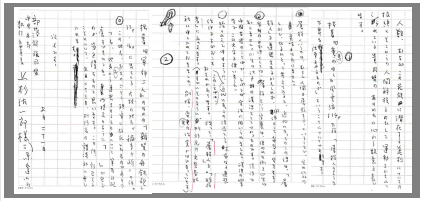
寺本知の惚れた人たち
司馬遼太郎（作家）

交流関係の広かった寺本さん。
司馬遼太郎さんとの交流を、
触れないわけにはいきません。

司馬さんから贈られた「そうめん」
に対する感謝の手紙もあれば、

作品「竜馬が行く：風雲編」にある
差別表現に対する寺本さんからの
申し入れ書、そして司馬さんからの返信など
緊張感を伴うやり取りもみられる。

司馬遼太郎さんからの手紙



寺本知の惚れた人たち
水上勉（作家）

「また、灯が消えた、と思った。」

寺本さんの死に際し、水上さんがこう残している。

「淋しくて、やりきれない。
　寺本知さんは、この世に生きておられるだけで、
　私には歩く道を照らされていた人なのだ。」

一方、寺本さんは水上さんに「詩人」としての共通点を見出していたようである。

水上さんにも詩人になりたい時期があった
と、お聞きしたことがあります。
しかし、水上さんの作品にあるお母さんの追憶…
あれほど美しい女性の姿を描けた文章…詩はないと思いました。

水上勉の「父と子」出版記念会で

寺本知の惚れた人たち
灰谷健次郎（児童作家）

灰谷健次郎さんという
すぐれた児童文学作家の影響で、
子どもの詩を読んで、感動しては
泪を流したりうなったりしています。

おとなは
言葉の知恵で生きているが、

幼い子どもは、
日光や風や木や島や
自然のあらゆるものと
交換できる言葉で生きている……

灰谷健次郎さんと解放会館応接室で

寺本知の惚れた人たち
金城　実（彫刻家）

芸術を生み出す心は
闘うことができる。

すぐれた彫刻家金城実氏を中心に
多くの村民や、
中学生たちが協力して、
美事につくりあげてゆく
大きなモニュメント「平和の像」。
真の文化、芸術は、
はたらく人民たちが生み出すもの
であることを実感させられた。

寺本知の惚れた人たち

佐田稲子（作家）

山田洋次（映画監督）

丸木俊（画家）

安岡章太郎（作家）

斎藤真一（画家）

井上光晴（作家）

寺本知の仕事

たたかいの祭り

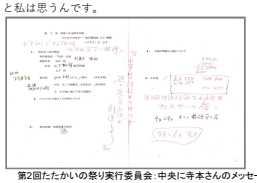
部落解放同盟中央本部主催の
部落解放全国文化祭が
1978年11月（昭和53）に大阪で、
第8回（1995年）まで開催された。

第1回たたかいの祭りのポスター
部落解放・人権研究所ウェブより
http://blhrri.org/myumon/post-war60/050.htm

…そりゃ、理論的な追究、研究は、ひじょうに大事なんですけれども、
やはり、こう、人間が悲しいときに歌ったり、
うれしいときに声をあげて表現したり、踊ったりするということは、
これは生きている人間の、ほんとうの姿ですからね。

こういうものを大事にしないで、やはり部落解放運動、
人間のほんとうの解放というのはありえないんではないか、
と私は思うんです。

寺本知『魂の種』219頁より。



第2回たたかいの祭り実行委員会：中央に寺本さんのメッセージが。

寺本知の仕事

識字運動、即人間解放運動

寺本さんは、
解放同盟中央本部文化対策部長時、
全国識字経験交流会を開催した。

識字運動への熱い想いを、
次のように語っている。

私は解放運動は文化運動だと、文化運動というと難しいけれども
人間の心を豊かに楽しく、解放するということだと思っています。
そのためには部落解放運動も、そういうことに努力せなあかん、
識字学級って同じことなんです。
識字運動即文化運動なんです。
また、識字運動即人間解放運動なんです。
そうでしょ。
文字で表現していく。
今はもう「表現」っていうことはすべて。パフォーマンスといいますか。

識字運動とは、単に文字だけを覚える
学習の場なのではなく、
すべての人間解放の作業が取り入れら
れた文化運動なのだ、
寺本さんは繰り返し強調していた。

よみかき・きょうしつ・とよなかのある日の風景

寺本知の仕事

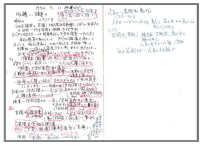
「リバティおおさか」設立

1995年12月「リバティおおさか」
リニューアルオープン時
（寺本知さん右から5番目）

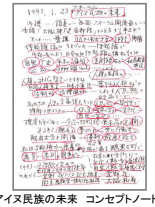
「なにわ」の庶民生活と、
文化のかかわりを見つめ直しながら、
人権文化を育てていく拠点として、
大阪人権歴史資料館（リバティおおさか）は、
1985年（昭和60）12月にオープンした。

「リバティおおさか」設立に向けて動き出した1982年（昭和57）、常務理事に就任。
1990年（平成2）からは館長に就任、亡くなる1996年（平成8）まで務めた。

「リバティおおさか」では「沖縄おどり」や「アイヌ民族の未来」など人権と文化、
そして「なにわ」をつなぐ様々な催しが行われました。
寺本さんの残したコンセプトノートでは、
「文化を通じた人間の解放」
という強い想いが残されています。



沖縄おどり　コンセプトノート



アイヌ民族の未来　コンセプトノート

寺本知の仕事

「豊中文学」

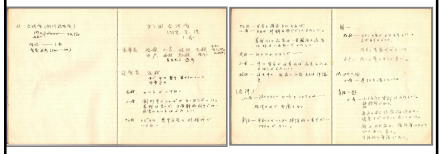
『豊中文学』は1958年（昭和33）7月31日に創刊され、
現在までに第34号（2013年3月31日）発行。

「第1回会合1月6日夜」と書かれたメモには、
会の名称を「豊中文学の会」、
雑誌名を「豊中文学」に決定したことが記されている。

創刊号で、寺本さんは創作小説「黒い雪」を発表。
部落問題を真正面からとりあげた作品であった。

1920年代から電灯が普及、「電柱一本立ててなんぼ」という「稼ぎ」はいいが、
「命の危険」を伴う仕事につく人がムラに多くいた。
主人公の甥もそのひとりで、感電死し、その亡骸がムラに届けられるシーンでは、
当時のムラの様子、ひとびとの直面してきた「悲愁のきわみ」が描かれている。

『豊中文学の会』（1958. 1）と題された寺本さんの自筆ノート



寺本知の仕事

部落解放文学賞

第1回部落解放文学賞よびかけ

部落解放文学賞は、差別を見据えた文学の
深化と広がり、さらに部落解放を目指した文化
活動の拡大と発展を目的に1974年（昭和49）
に創設された。

小説・詩・識字・記録文学・児童文学・戯曲・評
論など、7部門で、識字部門が設定されている
ことが大きな特徴である。

寺本さんも創設時から大きく関わっており、
1978年（昭和53）の第5回からは実行委員長、
1990年（平成2）からは実行委員会代表を務め
てた。

現在も、反差別の視点にたった数多くの作品
が寄せられている。

寺本さんは**「差別と闘い、人間の解放をめざす文学賞」**、
「識字によって文字を奪い返した人々をも対象にした文学賞は世界的にも類をみない」と誇りに思っていた。

第17回部落解放文学賞授賞式の様子

寺本知の語録

識字がひらく心の眼

識字運動は人間解放運動である

識字運動　これは解放運動の原点なんです。
差別によって人間性を奪われてきた
ひとつのあらわれだと思いますね。
だから、
文字だけにこだわっていたらあかんのです。
新しく文字を知ったとき、
人間としての自覚　生まれ変わるというか、
世の中がもっと広く見えてくるんです。

「字を知って、夕焼けが美しい」

字を知ることは、
それを通じて人間の眼がひらけ、
心が豊かになってくることなんです。

1987年

寺本知の語録

文化とは下から萌えるもの

にんげんは
懸命に働く
ゆたかな収穫があれば
おどりあがって喜ぶ
ときには
大声で唄う

文化芸術は
貴族の飾り物ではない
権力者の独占物でもない
ましてや
単なる商品ではない

人間は
美しいものに
感動する
その感動は
ときには
美の創造となり
真の造型となる
その存在は
時間をこえて
永遠となる

文化は働く者が創る
大地から盛り上がる
下から萌えあがる

にんげんは
すばらしい
労働の歓喜
生活の哀歓から
うつくしく
豊かな
文化を創る

文化とは
人間の
解放である

寺本さん未発表作

寺本知の仕事

差別とたたかう文化会議

差別とたたかう文化会議は、1975年（昭和50）に発足した部落解放運動に携わる文学者・研究者・活動家等の結集による団体であり、差別の問題を正面から見据えた日本で最初の文化団体と言われている。

差別とたたかう文化会議結成集会の様子

寺本さんは会計として、野間宏さん（議長）や土方鐵さん（事務局長）などと共に、雑誌「差別とたたかう文化」の発行をはじめ、部落差別事件の調査、海外の被差別民や来日したアジア・アフリカ作家・詩人との交流、たたかいの祭りや部落解放文学賞への協力などの活動を展開。
さらに、在日韓国・朝鮮人、沖縄、アイヌ、障害者の問題や、現代文明・文化の危機といった問題についても提起した。

雑誌「差別とたたかう文化」

寺本知の語録

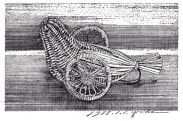
開かれた「部落問題」

芸術は、同和問題を
「部落だけ」の問題にしない。

第五中学校の聞き取り学習
結果を芝居の脚本にしていく。
二十一名の生徒のうち
部落地区の生徒は六名
つまり、ほとんどが外部の生徒

「成績さがらなかったらいいでしょ？」
親からの反対を押して参加する生徒もいたと聞く。

同和問題は、
「部落だけ」の問題ではない。



1990年

寺本知の語録

文化、芸術で戦うということ

文化、芸術で戦っている人がいる。

例えば　ピカソ。
その作品『ゲルニカ』。
ピカソはこう言う。
「すぐれた絵画は闘うことができる」

芸術を生み出す心は闘うことができる。

ある海岸には　そこの村人と金城実氏が作成した
大獅子　シーサー　の作品が飾られている。
米軍支配から　その海岸を守るため、
その戦いが続いている。

『ゲルニカ』
スペイン内戦でナチスから史上初といわれる無差別空爆を受けた町「ゲルニカ」を描いた作品。

1990年

寺本知の語録

理屈じゃない心の底の大切さ

でもこういう文化運動っていうのは
理屈だけではあかんのです。
文化　芸術　芸能というのは
感性にうったえることが大切です。
差別したらあかん
というても理屈だけじゃ　心に通じません。
差別がどれだけ被差別部落民をさいなみ、
その差別は結局　差別者も含めて
その人間社会の**人間すべてを冒涜している**
ということに気づいてこないとあかんのです。
それを理屈やなしに
いろんな具体的な表現によって
文字や演技や絵によって相手の心に訴える。
そこで**心の底から**差別はあかんことや
と気づかさなあかん。
だから文化運動とはとても大事なんです。

1987年

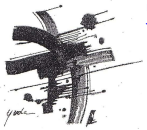
寺本知の語録

文化とは

人間が生きているということは、
芸術を創造し、創作すること。

嬉しかったら、歌を歌う、踊る。
表現する。
人間が解放されていく。

解放されるとは、
豊かに、
そして楽しく生きるということ。



1990年